

八ヶ岳エコーラインと坂本養川

池田 隆

中央高速道に乗り甲府盆地を過ぎると、正面に八ヶ岳連峰の滑らかな西麓が見えてくる。その先の長い坂を上り切った辺りが中央高速道の最高地点、甲州と信州の国境である。次の諏訪南インターを出て直登すると、八ヶ岳エコーラインと直交する。

農地と山林の境界である標高千百メートルの等高線にほぼ沿って、富士見町から原村、茅野市へと続く約十六キロの広域農道である。背後に富士と甲斐駒ヶ岳、右手間近に八ヶ岳、正面遙かに諏訪湖と北アルプス山脈、本州一の雄大な眺めの高原ドライブコースであろう。

九月になると左手に広がる緩斜面は稲穂の黄金色一色に染まる。車から下り田園散歩を楽しんでいると、急に気になり出した。どの田圃にも整然とした水路が設けられているが、その水源は一体何処だろう。

エコーラインの途中にも二三の深い谷が有り、大きな橋が架けられている。しかし川の水量は少ない。しかも此処からは随分と離れている。その疑問は八ヶ岳総合博物館を訪れて解明した。江戸後期にこの地域の名主であった坂本養川の功績だった。

この高原地帯は縄文中期には人口密集地であったが、稲作主体の時代となると水に乏しく集落も消滅する。平地の少ない土地柄に領民の生活は苦しい。彼は八ヶ岳連峰の北西部を流れる水量の比較的多い川の上流部より、延々と南西部の高原へ可能な限り水平に用水を導く新田開発案を思いつく。しかし途中で幾つもの沢や尾根を越えなければならぬ。

二十五年かけて江戸などで治水技術を学び、地元に戻り具体策を練る。高島藩へ具申するが、あまりに壮大な案のうえ御家騒動もあり、十年も止め置かれた後に漸く実現する。

せぎ（堰）とよぶ一間幅の水路が架橋やトンネルを通り、高原の上端部から櫛状に分水する。また途中で交差する小川とは水量のみならず、水温や水質まで考慮して互いの分量を決めている。二百年後の今日も立派に活用されているこの治水技術は世界かんがい施設遺産にも登録されたとのこと。